



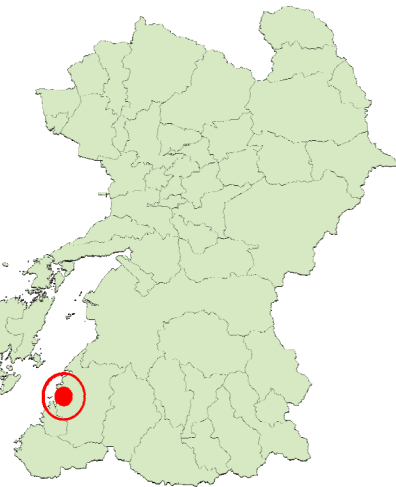
海を知り、山を知る～高校生と取り組むアマモ場再生～

芦北地域アマモ場再生・保全活動組織

芦北町について

芦北町は、熊本県の南部に位置する。緑豊かな山々が連なり、かつては坑木林業が盛んに行われた。しかし、石炭業とともに坑木林業が衰退し、かわりに山麓を利用した甘夏みかんやデコポン栽培が町の基幹産業となった。

町には、大関山を源とする佐敷川と湯浦川が流れ、八代海へそそぐ。八代海では今もお打瀬網漁が行われ、その操業風景は湯浦などの温泉地とともに観光資源になっている。

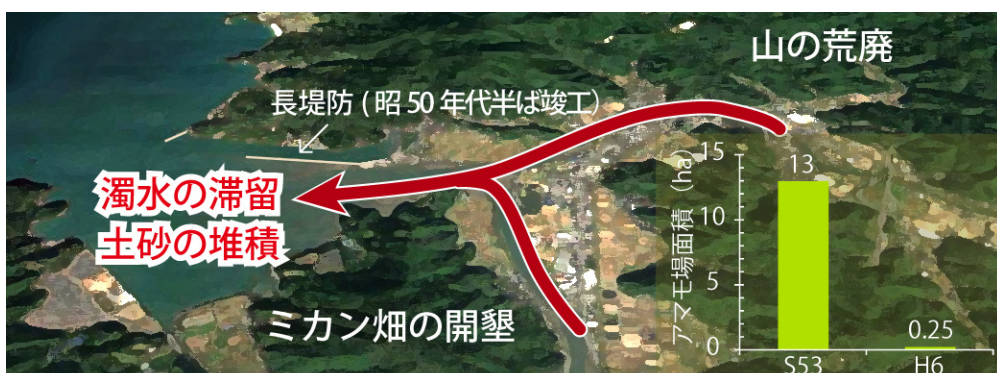


アマモ場の現状

町の中心部を流れる佐敷川と湯浦川は、野坂の浦と呼ばれる入江を通じて、八代海へと注ぐ。

野坂の浦には、かつて広大なアマモ場があった。しかし、昭和 40 年代の坑木林業の衰退と、それに用いるマツの害虫被害の激化によって山林が荒れたこと。また、みかん畑の開墾が行われたことなどによって、河川から流入する濁水や土砂の堆積が増え、アマモ場が大きく衰退した。

環境省の自然環境保全基礎調査によると、昭和 53 年に 13ha あったアマモ場が、平成元年前後には消失したと報告された。また、熊本県立大学などが行った平成 6 年の調査では、昭和 50 年代中頃に整備された長堤防の港側（以後、港側を内海、外側を外海と称す）に 0.25ha のアマモ場が認められるだけで、大規模な藻場があった外海では全てが消失していると報告された。



アマモ場再生活動のスタート

当時、打瀬船で主に漁獲されていたエビ・カニ類の水揚げが大きく落ち込んでいた。そうしたなか、「岡山県日生のアマモ」の取り組みを知り、漁民の森づくりと一緒に進めていた芦北高校林業科の先生に相談した。

相談を受けた芦北高校林業科では、海の現状を知ること、森や林業の重要性をより理解することができると考え、3 年生の授業である課題研究のテーマの一つにあげ、アマモ班が結成された。

こうして平成 15 年に、漁業者・漁協・芦北高校林業科アマモ班の連携のもと再生活動がスタートすることになった。



再生活動の内容

アマモ場の再生活動は、長堤防の港側の内海に残存するアマモ群落を活用して、堤防外側の外海をメインに移植法と播種法で行ってきた。

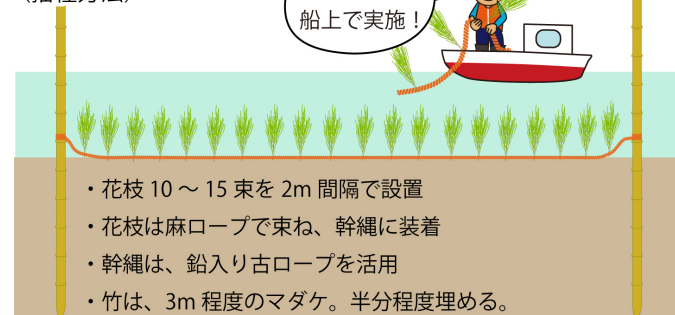
活動当初は、移植法ではポット法や粘土法、割り箸法などの様々な手法を、播種法ではコーヒー豆の袋「ドンゴロスマット」を活用した手法を検討した。

現在は、播種法を主体に活動を展開している。ただし、当初採用していたドンゴロスマット法は、①種の採取作業が「花枝採取－馴致－選別」と労力を要すること、②設置作業が真冬の深夜の干潮時で作業性が悪いこと、③経費がかかることから、現在は「ロープ式下種更新法」にて取り組みを行っている。

ロープ式下種更新法は、林業技術の天然下種更新法をヒントに、アマモ班の先生と学生で独自に考案した。天然下種更新法とは、種子を落とす母樹を適切に残しながら樹木を伐採し、伐採後の裸地に効率良く造林する手法である。これをヒントに、種を付けたアマモの花枝を採取し、それを花枝ごとロープに束ね造成エリアに設置し、種を自然供給する方法を思いついた。

この方式を採用したことで、作業性が向上し、また経費が削減され、広い範囲で活動が行えるようになった。また、そのことが、アマモ場の拡大に大きく貢献した。

ロープ式下種更新法
(播種方法)



活動の成果

内海にわずか 0.25ha しか残っていなかったアマモ場が、長年の取り組みによって外海にも広がり、その面積は現在 3.2ha まで回復した。

本活動は、学生の教育や就業の面でも良い効果をもたらした。

アマモの移植活動は、真冬深夜の干潮時に作業が行われ、学生にとって大変労力を要す取り組みである。しかし、ここで得られた苦労は、自然を相手にする林業科の学生の貴重な体験になっている。また、シンポジウムなどでのプレゼンテーション、小学生や園児を対象とするアマモ教室の開催など、公の場に立つ機会が得られ、こうした経験や実績が就職活動の良い自己 PR につながっている。

アマモ場は総じて拡大傾向にあるが、経年的な変動が局所的にみられる。現在、アマモ班に属していた学生が、先生になって学校に戻り、活動を引き継いでいる。高齢化・後継者不足にある漁村の現状において力強い助っ人である。今後も、高校生とともに活動を継続させ、かつての豊かな海を復活させ、後生につなげたいと思う。

